炉辺の枕(14)

『若者よ、マルクスを読もう／内田樹、石川康宏』

美賀多台　つだわたる



『若者よ、マルクスを読もう』(以下『若マル』)シリーズは4巻＋番外編の合計5冊が出版されています。1巻2巻は発行された時に読んでいて今回は3巻4巻(番外編は読めず)を大急ぎで読んで、シリーズ全体を紹介することにしました。

1 巻が 2010 年に発行され4巻は 2023 年です。内田樹と石川康宏という、マルクスを敬愛している、きわめて個性的な大学教授の往復書簡で構成されていますが、それで 13 年も続いたのは、二人の距離感が良くて、しかもとても面白い本だからだと思います。

さらにこの本の中でも二人から感謝されている、かもがわ出版の松竹伸幸さんの丁寧なフォローがあったからでしょうね。

『若マル』が、韓国と中国でも出版されていること、社会主義共産主義に対する思いが随分違う国で読まれる、しかも中国共産党の推薦図書になっていることは、その面白さ以上に驚きでした。

二人は政治的な立場が違いますし、石川さんがマルクシスト(マルクスの思想をマルクスの用語を使って語る人)内田さんはマルクシアン(マルクスの思想をマルクスの用語ではなく、自分の言葉を使って語る人)ですが、お互いに補完し合っているし、張り合っている感じもありますから面白いのです。

マルクスの考え方を解き明かす

「若者よ」と呼びかけていますし、前書きでも高校生をターゲットにしていると言いますから、難しい用語は解説し、文体も読みやすく書かれています。高齢者が読んでも楽しいですね。

もっとも二人とも単独の著書でも分かりやすいです。

しかし題材にしているマルクスの本は難しいです。タイトルは『共産党宣言』『ユダヤ人問題に寄せて』『ヘーゲル法哲学批判序説』『経済学・哲学草稿』『ドイツ・イデオロギー』『フランスにおける階級闘争』『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』『賃金・価格および利潤』『フランスにおける(の)内乱』『資本論』です。

それぞれに二人が書簡を交換するスタイルです。

この他に二人の対談『もしマルクスが現代の日本に蘇ったら』『報告と批評「アメリカとマルクス」』や『新華社への回答』等を掲載しています。

お互いの役割分担は、本について石川さんが内容を詳しく紹介し、内田さんが全く別の切り口で、本の肝を紹介するというパターンでした。

とにかくマルクスとマルクスの生きた時代で彼が何を考えたか、そして現代日本においては、マルクスを学ぶことで何を分析できるのか、そんなことがわかる本でした。

マルクス主義の解釈

この本を読んで面白かったことを何点か書いておきます。

まず『共産党宣言』です。この本はマルクスが 29 才の時に書いています。

マルクスが何才でどんな暮らしで何をしたなど、全く意識したことはありません。漫画『マルクス＆エンゲルス 1～4／丸川楠美・野口美代子・円谷源』を読んで、その人生を初めて知りました。

『若マル』はマルクスの著書と彼の成長を絡めて記述します。『共産党宣言』は初期ですから色々な意味で限界を持っています。しかしその結びの言葉が素晴らしいのです。

「万国のプロレタリア団結せよ」

労働者が社会を変革する中心的存在ですが、そこでマルクスは「団結」が一番大切、それが起点だと強調しました。

内田さんは「真の革命宣言は・・・『友愛』の言葉でなくてはならない・・・無数の凡庸な革命家たちに卓越している」と言い、私もそれに全く賛成です。

『賃金、価格および利潤』のところでは、石川さんは本編に入る前にマルクスの「史的唯物論の定式」を抜き書きしています。そしてこれは「『現代』を捉える指針」と言います。

史的唯物論とは「社会の全体をとらえるには経済（家族のあり方なども含むかなり広義なもの）への理解を根底に据える」と説明しました。

その社会の衣食住の生活を支えるシステムを知ることが、社会全体を見る基本だと思いました。これは私の映画批評の基準になっています。

『〈報告と批評〉アメリカとマルクス』は、二人が南北戦争とマルクス、アメリカ共産党等を中心において語るのですが、なによりロシア革命の成功が、マルクスが考えた革命の道筋、社会の変化発展を大きく変えていったことを知りました。

そして「マルクス・レーニン主義」はスターリンの造語であり、マルクスの考えを大きく歪める原因となっています。

現状の分析から始める

色々な経緯を経て、現在マルクスエンゲルス全集を私は持っています。でもほとんど読んでいません。『資本論』だけは若い時から労働者教育協会の学習会で1巻を 3 回、2 巻 3 巻は 1 回読みました。しかしどれほど理解できたのかはわかりません。

『若マル』を読んで、マルクスの読み方は全てを理解するものでなくていいと知りました。マルクスの理論をしっかりと理解していなくとも彼の考え方を辿るだけでも十分なのです。

『若マル』最終巻は『資本論』です。

この本はまさにマルクスの集大成だと思います。48 才の時に第 1 部が出されますが「別格

中の別格」と石川さんは書きました。しかし第 2 部第 3 部はマルクスの草稿をエンゲルスがまとめたもので、色々な齟齬があったようです。それはそれで今後解明されていくでしょう。

私が痛く感心したのは、マルクスが労働者の実態について詳細について書いているという内田さんの指摘です。

マルクスは彼の目の前にいる労働者、プロレタリアートの現状、悲惨な労働と暮らしを深く掴んで、それを変えるために何が必要か、どうすればいいかを考えました。

彼の卓越した理論を生み出した源泉はここにあったのです。

この現状の把握、これが現代の問題を考えるうえでも最も必要なことだと思いました。